

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770171

研究課題名(和文) 言語の身体性に注目した英語の前置詞の類義性・反義性・多義性の実証的な研究

研究課題名(英文) A cognitive study of the synonymy, antonymy and polysemy of English prepositions: With special reference to linguistic embodiment

研究代表者

大谷 直輝(Otani, Naoki)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・講師

研究者番号：50549996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、認知言語学の初期の頃からの中心的なテーマである前置詞の基本的な意味関係(多義性、類義性、反義性)の記述・分析を行う。本研究の研究成果は以下の三点に要約できる。第一に、身体性に注目した前置詞の意味記述を進めることで、辞書の執筆を行った。第二に、前置詞の基本的な意味関係を定量的に考察するため、言語コーパスに基づく意味分析手法を構築して改良した。第三に、言語機能を動機づける要因としての身体性に注目することで、前置詞やその副詞形である不変化詞には身体基盤に基づいて、内容的な意味から拡張した文法機能や談話機能が存在する点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project focuses on the basic lexical relations of English prepositions, which has been studied in the field of cognitive linguistics from its inception. The achievements of the projects can be summarized as follows: First, this project described the polysemous nature of prepositions and basic lexical relations among prepositions in terms of linguistic embodiment. Its results are used for writing the dictionary entries of prepositions in an English Japanese dictionary. Second, this project proposed a corpus-based method to describe the semantic and pragmatic characteristics of prepositions, and then, tried to improve the methodology. Third, by focusing on linguistic embodiment, this project revealed that various types of grammatical and discourse functions are entrenched in a large number of prepositions, which emerge through our body experience.

研究分野：認知言語学、構文文法、コーパス言語学

キーワード：前置詞 多義性 文法化 構文 コーパス 動機づけ

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究全体の背景

語と語がどのような関係にあるかという問題は、「言語は世界を分節する網の目」と主張するソシュール以降、現代の言語学の中心的な課題となり、構造主義の意味成分分析、ウォーフによる言語相対論、語彙の意味論 (Lexical Semantics) など、様々な分野で研究されてきた。1980年代に起こった認知言語学では、語彙間の関係をカテゴリー化の問題として捉え直すことで、反義性や類義性などの基本的な語彙関係が人間の認識の仕方に強く動機づけられている点を明らかにした。基本的な語彙関係には、人間による世界の認識の仕方 (=カテゴリー化の方法) が反映されるため、現在、カテゴリー化に注目した基本的な語彙関係の分析が行われている。

(2) 先行研究の問題点

一方で、現在行われている基本的な語彙関係の分析には、以下の問題点が見られる。

(1) 意味のネットワークの記述が主観的にされており、実証的な裏付けが不十分である。

(2) 意味を生成する基盤としての身体の役割の考察が不十分であるため、意味のネットワークを動機づける基盤の分析や、周辺的な意味の記述に不備が見られる。

従来の語彙関係の分析では、データ不足や方法論の未整備のため、語彙関係の実証的な研究は進んでいなかった。一方、理論的な考察や学際的な研究が進み、豊富なデータを使用できる現在、意味を生成する基盤としての身体に注目した実証的な研究を行う準備が整っている。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、これまでの研究成果を踏まえて、英語の前置詞の体系に見られる様々な語彙関係を詳細に記述して、前置詞の多様な振舞いを動機づける認知的な基盤を考察する。また、研究全体を通じて、言語のカテゴリー化を記述的・理論的に研究する際に必要となる3種類の実証的な研究方法を提示する。さらに、得られた記述や知見を実践的に応用して、言語使用を反映した辞書の執筆や、英語の教材開発を行う。

(2) 本研究の目的は、具体的には、以下の4点にまとめられる。

記述研究：類義性・反義性・多義性など、前置詞に関わる様々な意味ネットワークに注目して、英語の前置詞体系の詳細な記述を行う。特に、類義的・反義的な前置詞に見られる非対称的な特徴に注目する。

理論研究：前置詞の意味のネットワークを動機づける基盤としての身体の役割に注目しながら、類義的な前置詞が出現する環境の違いや、反義的な前置詞の対 (up-down, above-below など) に見られる非対称的な意味拡張がどのように生じるのかを考察する。

方法論：学際的な見地から、言語学の質的な研究方法に、定量的なコーパス研究と心理実験を組み合わせ、実証的な収束証拠 (convergent evidence) を供給する研究手法を提示する。

応用研究：前置詞の体系的な意味の記述や、語彙ネットワークを動機づける要因の分析を応用することで、英和辞典の前置詞の項の執筆や、英語の教材開発を行う。

3. 研究の方法

(1) 前置詞の体系的な記述とその基盤

(a) 反義的な前置詞に見られる非対称性とその基盤 (平成26年度～平成28年度)：up-down、over-underなどの反義的な前置詞の対の間に見られる非対称的な意味拡張を体系的に記述することで、言語レベルの非対称性を動機づける認知的な基盤について論じる。

(b) 類義的な構文とその基盤 (平成26年度～平成27年度)：類義的に使われる前置詞や句動詞のコーパス内に頻出する共起パターンを考察することで、類義的な語句が実際は異なる文脈で使われる点を明らかにする。また、類義的な語句に見られる異なる文法的・意味的な振舞いが、前置詞の空間的な意味に動機づけられる点を明らかにする。

(c) 意味を生成する基盤としての身体の役割 (平成27年度～平成29年度)：前置詞の多様な振舞いの意味的な基盤を考察するために、意味を生成する基盤としての身体の役割に注目して、人間による世界の認識の仕方が言語の意味的特徴や文法的特徴をどのように動機づけるかを論じる。

(2) 実証的な言語研究手法の確立

(a) 定量的な言語分析手法の改良 (平成26年度～平成27年度)：申請者が提唱してきた定量的な意味分析モデルを精緻化する。特に、従来のモデルで、最も主観的に決定されてきた、意味的・談話的情報に関して、Atkins (1987) による意味の分類基準や、WordNet (シソーラス) などを使用することで、客観性の高い分類基準を提示する。

(b) 質的で定性的な研究の導入 (平成27年度～平成29年度)：前置詞の意味を動機づける人間の空間認知の方法を論じるため、上下・内外などの基本的な空間認知に関するアンケート調査や、空間的な位置と結びついた抽象的な概念に関する心理実験を行う。特に、言語が認識にどの程度、影響を与えるかを調べるために、カリフォルニア大学での在外研究等を利用して、日本語母語話者と英語母語話者の対照実験を行う。

(c) 実証的な研究の組み合わせ方の検討 (平成28年度～平成29年度)：これまでに

行ってきた3種類の言語分析の方法論を統合して、実証的な言語研究をするために必要となる収束証拠を示す方法論を提示する。

(3) 英語教育への応用研究

- (a) 英和辞典の前置詞の項の執筆(平成28年度～平成29年度): 本研究で行った前置詞の詳細な記述を用いて、英和辞典の前置詞の項の執筆を行う。特に、前置詞の多義的な意味の関係を明示的に示せるような項目のデザインを考案して、英語学習の助けとなるような、前置詞の実践的な記述を行う。

4. 研究成果

(1) 記述研究

・前置詞の語彙関係の中で、類義性と反義性に注目をして、類義的・反義的な関係にある前置詞が示す非対称的な振舞いの分析を行った【論文】

・45の前置詞を例にして、コーパスを用いた前置詞の名詞的用法の分析を行い、前置詞の特徴の体系的な記述を文法的な観点から進めた【論文】

・前置詞とその副詞形である不変化詞は、それぞれどのような場所で現れやすいかを、身体性の観点から考察した。【論文】

(2) 理論研究

認知言語学と談話機能言語学の学際的な研究を推し進めるため、両者の接点となる現象である具体レベルの構文に注目しながら、両言語学の統合を試みる共同研究を行った。【論文】

(3) 方法論

・認知言語学におけるコーパスを用いた研究手法の紹介を行った。これまでの用法基盤モデルに基づく実証的な研究を概観した。【図書】

・定量的な意味分析モデルを用いた動詞不変化し構文や前置詞の多義性、反義性、類義性の分析手法を示した。【発表】

(4) 応用研究

・様々な前置詞に見られる基本的な語彙関係を分析することで、英語の辞書の執筆を行った。【図書】

・実証的な言語分析手法を行うための入門書の一章を執筆した。【図書】

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8件)

大谷直輝・中山俊秀・佐治伸郎・吉川正人 2018. 「用法基盤モデルの観点から言語知識について考える」『日本認知言語学会論文集』18: 573-596 [査読無し]

大谷直輝 2017. 「認知言語学演習解いて学ぶ認知意味論」『英語教育』(9月号)92. 大修館書店. [査読無し]

大谷直輝 2017. 「前置詞か副詞辞かを動機づける認知的な要因について」『日本認知言語学会論文集』17: 352-364. [査読無し]

大谷直輝 2016. 「謎解きの英文法 副詞と数量詞」『英語教育』(2月号)91. 大修館書店. [査読無し]

大谷直輝 2016. 「実用的な文法について考える: 語の反義性に注目して」『英語教育』11月号: 26-28. [査読無し]

長加奈子・大谷直輝・大橋浩・川瀬義清 2016. 「コーパスからの認知言語学へのアプローチ」『英語コーパス研究』23: 61-78. [査読有り]

大谷直輝 2015. 「類義的な動詞不変化詞構文における不変化詞の指向性」『認知言語学研究』1: 202-222. [査読有り]

大谷直輝 2015. 「前置詞の補語句として用いられる前置詞句の名詞的用法について」『JELS』32: 98-104. [査読無し]

〔学会発表〕(計 9件)

大谷直輝・中山俊秀・佐治伸郎・吉川正人 2017. 「用法基盤モデルの観点から言語知識について考える」日本認知言語学会(第18回)、ワークショップ、大阪大学、2017年9月16-17日

Otani, Naoki (2016) "A usage-based approach to the spray/load alternation," The 9th International Conference on Construction Grammar (ICCG9), the Federal University of Juiz de Fora, Brazil, 5-7 October 2016.

Otani, Naoki (2016) "Prepositional Phrases used as Complements of Prepositions: A Functional and Cognitive Account," the 4th conference of the International Society for the Linguistics of English, Adam Mickiewicz University, Poland, 18-21 September 2016.

Otani, Naoki (2016) "A cognitive analysis of the use of prepositions and adverbial particles in English," The 46th Poznań Linguistic Meeting, Adam Mickiewicz University, Poland, 15-17 September 2016.

大谷直輝 2016. 「前置詞か副詞辞かを動機づける認知的な要因について」日本認知言語学会(第17回)、明治大学、2016年9月10-11日

大谷直輝 2015. 「英語の不変化詞の直示的機能について」英語語法文法学会(第23回)、ワークショップ、龍谷大学、2015年10月24日(予稿集 pp. 2-6)

大谷直輝 2015. 「コーパスを用いた構文の分析」 英語コーパス学会(第 41 回)、シンポジウム、愛知大学、2015 年 10 月 3-4 日

大谷直輝 2014. 「前置詞の補語句として用いられる前置詞句の名詞的用法について」 日本英語学会(第 32 回)、学習院大学、2014 年 11 月 8-9 日

Otani, Naoki (2014) "Asymmetrical characteristics of up and down within synonymous verb-particle constructions in English," 5th UK Cognitive Linguistics Conference, Lancaster University, United Kingdom, 29 - 31 July 2014.

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

(4) 研究協力者 ()

〔図書〕(計 2 件)

大谷直輝 2017. 「コーパスと認知言語学」 赤野一郎・堀正広(編)『英語コーパス研究シリーズ(7) コーパスと多様な関連領域』51-76 東京：ひつじ書房

大谷直輝(分担執筆) 2015. 『スーパー・アンカー英和辞典』(第 5 版) 山岸勝榮(編) 学研プラス(前置詞の改訂を担当)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大谷 直輝 (OTANI, Naoki)

東京外国語大学・総合国際学研究院・講師

研究者番号：5054996

(2) 研究分担者

()